〈ＩＣＴ教育：高等学校 国語〉

論理的に書く力を育む小論文指導の工夫

――ＩＣＴを活用した情報収集と文章構成の協働学習を通して――

沖縄県立宜野湾高等学校教諭　翁　長　良　尚

Ⅰ テーマ設定の理由

急激なテクノロジーの発展、情報化やグローバル化などによる経済や産業構造の急速で大きな変化がこの時代に生きる人々の考え方や生き方を変えている。こうした社会状況を背景に「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(中央教育審議会答申)」（平成28年12月）では、「主体的に学びに向かい，必要な情報を判断」すること、「自分の考えを根拠とともに伝え」ること、「多様な人々と協働したりしていくことができること」「試行錯誤しながら問題を発見・解決し、新たな価値を創造していくとともに、新たな問題の発見・解決につなげていくことができること」を育てたい子供の姿と述べている。同時に、高等学校国語科に対して「主体的な言語活動が軽視され，依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必要がある」という点を課題として指摘し、今後は、「論理的思考力（考える力）が重要であり，自分の考えや意見を論理的に述べて問題を解決していく力」の育成を求めている。

しかしながら私自身の授業においては、教材文が長文化や複雑化によって、生徒は論理的な文章の正確な読み取りに困難を感じ、それが論理的な文章を書くことへの意欲を低めることにつながっているように感じている。さらに、生徒の日常生活ではＳＮＳを介したコミュニケーションが増え、考えや感情を簡単な単語や略語で交わす会話や、他人への承認欲求からより強い表現の語句や生徒間だけで分かる隠語を使用したり、抽象的表現で気持ちを伝えたりする傾向が見られる。このような変化は、自分の考えを明確にし、相手に同意や共感が得られるよう筋道立てて表現するという論理的思考力の育成の点で大きな課題となっている。

そこで本研究では、国語科の学習で課題とされる「書くこと」を研究領域とし、特に書くことへの意識、書く内容の充実、文章構成といった点に焦点をあてた研究を行う。文章を書くためにはまず、書く意欲や意識を高める必要がある。その手立てとして動画アプリを活用する。生徒は普段の生活の中で楽しみながら動画の視聴や作成を行っている。このことから、動画を作成することを目的とした自己アピール文やニュースのシナリオ原稿を書くという授業を行うことで、書くことへの苦手意識を軽減させるようにする。次に、論理的文章を書く力を育むために、生徒同士が協力しそれぞれの考えを形成できるようＩＣＴを活用した協働学習を取り入れる。特に文章化前の情報収集・整理・分類、要約までの学習過程を充実させ、集めた情報を基に段落構成やアウトラインを考えるという書く方法に焦点をあてた授業を行う。集めた情報は、Microsoft365のアプリであるOneNote Class Notebook（以下Class Notebook）に整理する。文章構成の考察にはグループやクラスが内容を共有し同時編集し可視化・明確化できるようMicrosoft Teamsに保存したExcelのワークシートを活用する。ワークシートは、集めた情報を具体例や根拠、問題点、解決策等、構成という文章の型に沿って入力できる様式とした。情報内容が構成・型のどの項目に入るのか、項目の前後のつながりはあるのかという思考を常に働かせながら学習を続けることで、論理的思考の型を習得することができるようにする。それにより、情報収集や文章構成などの過程を充実させ、意見や根拠を明確にした文章の記述方法の学習や他者との協働により考えを深める学習を通して、論理的に書く力を育むことができると考え、本研究のテーマを設定した。

〈研究仮説〉

国語表現の「小論文を書く」学習において、ＩＣＴを活用した協働学習を取り入れ、収集する情報内容の適切な選択と文章構成を常に意識して自己の考えを深めることで、文章内容の充実を図ると同時に、意

見・根拠が明確な論理的文章を書く力を育むことができるだろう。

Ⅱ　研究内容

1　論理的思考力を育む表現指導の工夫

(1) 論理的思考力育成が求められる背景

「これからの時代に求められる国語力について（文化審議会答申）」（平成16年2月）（以下、文化審議会答申）で「国語は，学校教育のあらゆる教科や様々な学問の基盤であり，自然科学の分野においても，その重要性は全く変わるものではない。」と述べている。特に「書く力」の領域における「目指すべき具体的な目標」について、今後は「文や文章を書いたりすることを通じて思考のプロセスがより自覚的なものとなることにより，より論理的な思考力・表現力の発揮が期待できる」として、論理的思考力の育成が必要だと述べている。

(2) 学習指導要領における「論理的思考力」

平成30年告示の新学習指導要領で、「論理的思考力」の定義として参考になるのは、「論理的、批判的に考える力を伸ばす」ことを目標にする「論理国語」の指導事項の記述である。具体的には、言語の形式的側面である「文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方」「段落の構造や論の形式」を理解し、言語の内容的側面である「自分の立場や論点を明確にして，主張を支える適切な根拠を揃えること」「効果的な文章の構成や論理の展開」などを活用する力が、論理的に考える力として定義されている。これらの学習過程で身に付けることができる力が、国の指針としての学習指導要領の求める論理的な力の説明として捉えることができるであろう。

(3) 国語科教育先行研究における「論理的思考」

井上尚美（2012）は、論理的思考の定義について「形式的論理学の諸規則にかなった推理」「筋道の通った思考」「分析、総合、抽象、比較、関係付けなどの概念的思考一般のこと。」とした。また、野中太一(2016)は論理的思考を、「課題や問題に対する考えとその根拠・理由を様々な思考様式を用いて相互に関連付けて思考を深めること、関連付けた考えを、筋道立てて表現し理解し評価すること」と定義した。そして「筋道を立てて表現すること」とは、図１のような関係性であると捉えている。井上や野中は、ある一定の様式に沿って順序立てて整理した形で言語化する活動や、文章構成や話のアウトラインを考えながら書くという行為そのものが、論理的思考と捉えることができると述べている。

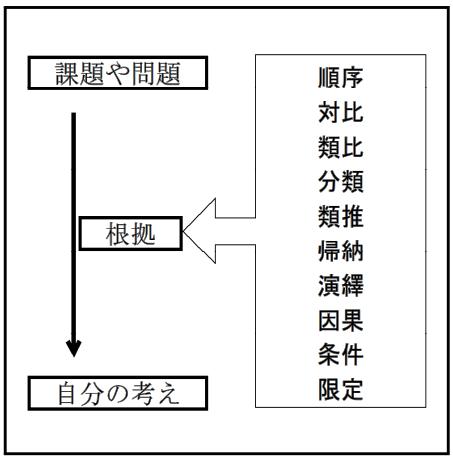


図１　筋道立てた表現のモデル図

(4) 論理的思考力を育む指導過程

「論理的な思考」を身に付けるための指導過程については、平成25年、国立教育政策研究所教育課程研究センターにおける「特定の課題に関する調査（論理的な思考）」において、表１のように結論付けられた。この調査は全国の高校生の「論理的な思考」とはどのような場合に働くのかを分析するため、国語、数学、脳科学の専門家が行ったものである。表１の①から⑥までの指導過程は、新学習指導要領の「書くこと」領域の指導事項と類似しており、この指導過程が、論理的に書く力を育むための方法の一つであることを示唆している。

表１　論理的活動の指導過程

種　類	活動内容
①理解 適用	資料を読み取り、規則、定義、条件等を理解し適用する。
②抽出 分析	多くの資料や条件から推論に必要な情報を抽出・分析する
③把握 評価	資料の趣旨や主張を的確に捉え評価する。
④関係 洞察	資料に提示された事象について論理的関係を洞察する。
⑤仮説 検証	前提資料から仮説を立て他資料で仮説を検証する。
⑥構造 判断	論点の根拠、議論構造を明らかにし適否を判断する。

2　論理的思考力と「書くこと」との関わり

(1) 論理的な文章を「書くこと」の意義

文化審議会答申(平成16年) では、「『書く』こととは，考えを整理し，考えることそのものの鍛錬にもなる。したがって，まとまった話をするためにも書くことは大切である。」と述べ、論述などの「書くこと」の領域における学習が十分に行われていないことを、国語科教育の課題として指摘している。また、文章表現について体系的に指導することによって、論理的思考力を高めることができるとしている。書くことの重要性・意義については、野口芳宏（2005）も、書くことで「筋道を立てて考える力、構造的にものを考える力、具体的に考える力、抽象化する力、詳述する力、簡略に述べる力等々が養われる。」と述べ、文章指導が、国語力を育み伸ばし、すべての学習の基礎となる思考力が身に付くという考えを示した。論理的な文章を書く力を身に付けることは、社会で起こっている問題や課題についての考えや意見や感性を、相手や目的に応じて分かりやすく伝え、理解し、社会の一員として生きていく手段にもなるという意味で意義がある。

(2) 論理的な文章を「書くこと」の課題

書くことの必要性や意義は認識されるものの、論理的文章を書くことに関しては、生徒自身が「書く内容がない」「書く方法・書き方が分からない」「書く意欲を持てない」という課題を持っていると、桜沢修司（2004）や野口芳宏（2005）などの国語研究者が指摘している。浜本淳逸（2016）は、文章を書けるようにするために「１つは書くべき内容を発見・充実させること、２つ目は書く方法を習得・活用させること」としている。そして、「文章内容を充実させる指導」と、論理的な文章を書くための「文章の型の指導」という２つの点が課題であり、これらを身に付けることが生徒の書く意欲につながると述べている。同時に、論理的文章表現の指導では「主張の明確化、根拠事例の収集と選択、文章構成上の型の習得のために、相互交流による表現意欲の喚起をすること。」が課題であるとし、「書くことへのためらいを減らして論理的文章を自ら書くよう仕向けるには、主体的で協働的な学びを行うといった指導方法に工夫の余地がある」ことも指摘している。また、ただ書く機会や場を与えるだけでは意見文を書けるようにはならないと指摘した清道亜都子（2013）の研究から考えても、高校生が自分の意見を述べ、論理的文章を書けない現状や課題に対しては、より具体的な指導方法の提示が必要となるだろう。

(3) 論理的な文章を書くための工夫

①　情報収集の観点と文章構成との関わり

本研究は、田中宏幸・小笹由花(2010) の「中・高等学校の生徒たちに意見文を書かせるには、意見を形成させることと論じ方を習得させること」とする研究を参考に、書くことの学習過程における文章化前の指導に焦点化する。文章内容の充実のための学習、及び文章の構成や型の学習という２点について、協働学習による主体的な授業方法と組み合わせ、論理的文章を書く力の育成につなげていくこととする。情報収集の観点及び文章構成・型については、これまでの研究者の指導資料、生徒や学生、社会人向けの小論文指導の参考書や問題集などを参考にまとめ、収集の観点と文章構成の観点を同一の型で活用することとした。

②　論理的な文章を書くための「内容充実」について

「書くこと」に対して苦手意識が生まれる理由の一つに「書く内容がない」という点がある。特に小論文などの場合、生徒自身が書く内容や意見を持たなければ書くことは難しい。社会的な実体験が乏しい生徒が自身の意見を持つためには、学校生活だけでなく家庭や社会と何らかの形で接点を持ち、その直接体験や間接体験から問題意識を喚起して考えを形成していくことが求められる。そこで小論文のテーマには、生徒にとって身近な「地域・社会・

福祉」分野から「少子化・高齢化」を選択し、生徒と関わりある課題から書く内容を発見させ意欲を喚起できるようにする。次に、小論文テーマに関する情報収集の観点を工夫する。一つのテーマに関する情報をただ闇雲に全てを集めようとすると、書籍や新聞・雑誌・インターネットから得られる情報は余りに多く、収集や情報の分類整理に時間がかかるという点で非効率的である。事前に情報収集の観点を示し、情報収集自体を目的にせず、構成を意識させる視点を示すことで、効率的に小論文の内容の充実を図ることができる。同時に、自分の経験や知識以外の事柄に触れることを通し、考えの深まりにもつながると考える。

③　論理的な文章を書くための「文章構成」について

「書くこと」に対して苦手意識が生まれるもう一つの理由は、文章構成が分からず書けないという点である。文章構成・文章の型の指導については、市毛勝雄(2010) の「始め－中－終わり」という構成、森岡健二 (1963) の「時間、空間、原因から因果、既知から未知」とする材料配列による構成法など過去に多くの実践がある。日本語の文章の型は、伝える相手や内容、伝達手段によっても大きく異なっているが、これらの実践は、まず一つの型を理解し、意見を分かりやすく的確に表現できる力が身に付けば、構成を変えて表現しても論理的文章を書けるとしている。一般に市販されている生徒向けの小論文参考書や大学生社会人向けの入社試験参考書、実際の大学入試の過去問題などにおいて用いられる代表的な文章の型は、「頭括式・尾括式・双括式」や「問題提起・反論先取り」の構成である。また、文章構成要素として特に必要な観点は、問題点、理想と現状の差異、個の思考から一般化した考えとすることができるかという点が重要だと指摘している。これらを踏まえ検討した結果、表２のような観点を、文章構成・型とすることとした。

表２　「情報収集・整理・分類」の観点と「構成」の型

ア　課題の定義	(一般的な意味、そもそもその課題とはどういうことかの用語説明)
イ　現状・具体例	(今何が起こっているのか)
ウ　背景・原因・理由	(どういう経緯で問題となったのか、なぜ起こったのか)
エ　問題点・課題	(どういう問題点があるか)
オ　対応策・解決策	(今後、問題点をどう解決すべきか、個から社会的解決)

(4) 論理的に書くための「事前学習」の工夫

従来、小論文などの論理的文章の指導方法は、小論文の表現事項や言語事項などについて教師が添削し助言を行うといった文章化後の指導が多い。この場合情報収集し構成を考え、文章化していく過程の事前指導が余りなされないために、生徒は自身の持っている範囲の知識を活用して書くこととなり、内容の充実や論理的な文章構成を意識した記述となることは難しい。生徒が論理的な文章を書くという場合、書く内容の充実と書く方法の獲得という文章化の前段階において、既に苦手意識を感じているということは、金子泰子 (2016) や奈良国語教育実践研究会(1990)の実践研究などで明らかとなっている。そこで、本研究ではこれらの点を工夫し課題解決を試みる。

①　論理的に書くための協働学習について

本来「書くこと」は個人で思考を巡らせ情報収集から文章化までを行うこととなるが、本研究では、意欲を持てないという点に対して、書く前の情報収集や整理という過程に協働学習を取り入れる。生徒同士が互いに分からないことや意見を聞いたり、構成をどうするかなど話し合ったりするという自発的な文章表現学習を何度も繰り返すことが、書くことに対する苦手意識を減らし学習に対する意欲につながると考える。同時に、小論文のテーマについて生徒が協力して情報収集を行うことで、個々の生徒の異なる視点からの多くの情報が収集できる。また、協働学習によって、情報の整理から各段落の要約文作成まで、時間をかけずに効率よく行うことが可能である。収集した情報の内容や文章の構成が妥当であるかを相互評価することで、テーマの問題点に気付き、解決策のヒントを得やすくなり、個人学習だけ

では得にくい文章の内容の深化や再構築、新しい発想も期待できる。

② 論理的に書くためのワークシートについて

文章を書く際には、テーマに関する情報収集を行わず、自身の持つ知識の範囲だけで文章化する生徒は多い。高等学校における小論文などの文章表現指導は、生徒が書いた文章について、教師が添削するというように文章化の後に行われることが多い。生徒自身がどういう情報を集めたらいいのか分からずに、闇雲に題材やテーマに関してインターネットによって情報収集や整理を行い、情報量や質に偏りが出たり、情報の再収集や再整理が必要となったりというような、文章化以前に困難さを感じる場合が多いとされている。

そこで本研究では、小論文に必要な「問題提起・現状・理由根拠・問題点・解決策」を論理的思考の流れの観点として定義し、情報収集や整理、構成など、文章を書く前の学習を充実させる工夫を行う。具体的には学習で使用する個人のワークシートと、グループやクラスで共有し、同時に編集するワークシートをExcel で作成し、観点に沿って情報収集・整理し、小論文のアウトラインや構成表が作成できるようにする（表３、表４）。グループやクラスの生徒は、タブレット端末から、Teams 内に置かれたExcel のワークシートを開き、同時に情報を入力・共有し、クラス全員の考えを参考にしながら、自分の考えをまとめることができるようにする。どの項目にどの情報を書き入れるのか、タブレット端末画面を見ながら話し合いを行い、情報を取捨選択したり構成を考えたりと、互いに思考を深め合いながら論理的思考力を高められるようにする。

表３　個人の構成表シート

	構成表(個人) 自分なりの構成を考えよう			
	項目	材料①	材料②	材料③
現状	若者一人当たりの負担大	高齢者人口割合増加	40年以上続いている	若者年金の社会保障負担大
	老々介護	現役世代に負担が増加	高齢者人口の層が増加	労働者の手取り所得の減少
原因・理由	食べ物の充実	少子化との関係がある	農業の発達	経済的負担が大きい
	出生率の低下	婚姻率の減少	女性社会進出	男女格差が減少した
	未婚化の進展	晩婚化・晩産化	夫婦の出生率の低下	仕事や勉学を優先将来暗い
	平均寿命の伸び	医療高度化	食の安定	経済的不安定
課題	老々介護が増える	介護者数が足りていない	環境整備の遅れ	仕事と子育て環境整備の遅れ
	若者一人当たりの負担増大	社会保障が保たれない	税金の使い道の見直し	老人も働ける環境にする
	労働力人口の低下	老々介護	母となる女性の減少	経済的不安を解消する難しさ
	経済成長や社会保障の問題	経済成長にブレーキ	社会保障の負担が増える	地域との交流の場を作る

表４　グループの構成表シート

	Eグループ構成表			
	グループ構成を考えよう	←左の語句を短い文で説明(要約)	生徒A	生徒B
現状	少子高齢化	少子化と高齢化が同時に進行すること	高齢者の増加	医療の発達
	晩婚化	平均初婚年齢が高くなる傾向	結婚意識低下	女性の社会進出
	ベビーブーム	赤ちゃんの出生が一時的に急増すること	40年以上少子化進行	ベビーブーム
原因・理由	医療技術の発展	最新医療機器使用と薬が増え衛生環境がよくなった	晩婚化	未婚化
	女性の社会進出	女性の働ける社会になった	子育て負担大きい	晩婚化
	未婚化	結婚の意思はあるが結婚をしていないひと。	医療技術の発達	共働きが多い
	晩婚化	平均初婚年齢がたかくなる傾向	女性の社会進出	育児費用が高い
課題	老々介護	介護者と被介護者がともに６５歳以上	仕事があって子	子育てをする人の
	子育ての支援が少ない	育休取得や子育て費用が高く経済的余裕ない	長時間労働	保育士の減少
	認認介護	介護者と被介護者がともに認知症である場合	子育ての支援が少	将来無子高齢化に

③ デジタルノートブック、デジタルポートフォリオについて

従来の授業では、集めた新聞や雑誌の記事を切り抜いたりコピーしたり、書籍の必要な部分を手書きでノートに整理したりと、情報の収集についてはスクラップノートやファイルなどを主に活用してきた。本研究ではClass Notebookをデジタルポートフォリオとして情報を収集、整理することに活用した。まず、生徒それぞれがタブレット端末を使い個人のページに集めた情報を、全体で共有できるページへまとめ、クラスやグループの全員が可視化できるようにした。そして、集約した情報をグループ全員で主体的に話し合いながら同時入力・検討・分析・整理が行えるようにした。さらに、項目として集めた情報を文章構成の型に沿って短文化させた。生徒はこれらの協働学習で、あやふやだった自身の考えをまとめることができる。それと同時に、自身では気付かなかった他者の考えを知ることができる。このように、集めた情報から自分自身のの考えをまとめて文章化し、グループメンバーと相互交流することにより、自身の考えを深め、論理的文章を書く力の育成につながると考える。

(5) ＩＣＴの活用の工夫

本研究において、Microsoft Teams、Class Notebook、Flipgridの3つを活用した。

① Microsoft Teamsについて

Microsoft社が提供するコミュニケーションツールで、Openアカウント[注i]で利用できるMicrosoft365のアプリの一つである。Teamsは他のMicrosoft365 のアプリと連携ができ、個人やグループで集めた多くの情報集約も容易に行える。そのため、集めた情報を基にしたグループやクラス全体での協働学習において活用することとした。本研究では、 Teamsに要約文をまとめるための個人用とグループ用のExcel ワークシートを置き、協働で編集が行えるようにした（表５）。

② Class Notebookについて

Class Notebookは、Teams と同じくMicrosoft365のアプリで、文字・画像・動画・音声など様々なデータ形式の資料の保存や共有ができるデジタルノートブックである。本研究では、Teamsと連携して、個人用またはグループ用のデジタルスクラップブックとして活用する。Class Notebook内の個人・グループ・クラス全体用のノートに、生徒一人一人が集めたWeb 上の情報のリンクや画像などを貼り付けて情報共有を行う（図２）。

③ Flipgridについて

Flipgridは、タブレット端末やスマートフォンなどを使って動画作成することができるアプリである。作成した動画は、クラスやグループの一覧へ投稿した後、瞬時に一覧表示される（図３）。メンバーの生徒はその一覧の中から見たいものを自由に選択して視聴できる。動画を視聴した後には、テキストや動画で感想やアドバイスなどのコメントを投稿可能（図４）で、その内容を全員で共有することもできる。

本研究においては、FlipGridを「ニュース動画の制作」と「自己アピール動画の制作」という２つの授業で活用する。２つの授業とも以下のような流れで実施する。

・原稿を作成し、その原稿を基に動画を作成する。
・Flipgridに動画を投稿し、グループ内で閲覧する。
・グループ内で相互評価を行い、投稿された動画に対するアドバイスを行う。
・アドバイスをもとに原稿を修正し、改めて動画を作成して、再度投稿する。
・Flipgrid内のクラス全体の動画を視聴し、コメントを入力する。

生徒にとって、動画を見たり作成したりすることは慣れ親しんだものであり、動画を活用して文章を書くことに結び付けることで、書くことに対する苦手意識を減らす効果が期待できる。また、文章記述を目的とする学習と動画作成を目的とした原稿シナリオ記述という学習により、意識的な違いが生まれるのかも検証していく。

表５　要約文ワークシート

課題	少子化高齢化の課題について、キミはどのような対策が必要だと考えますか。	
結論	少子化の課題について、私は子育てしやすい環境づくりの対策が必要だと考えます。	
短文要約	現状	保育園や子育て施設が少ない。また、保育士などの人材不足。
	原因・理由	女性の社会進出が進んだことによる結婚への意識の変化
	課題・問題点	働き手が不足し働き手へのふたんが大きくなる
	対策・解決法	医療の支援制度や、保育園などの子育て施設、そこで働く人を増やす。

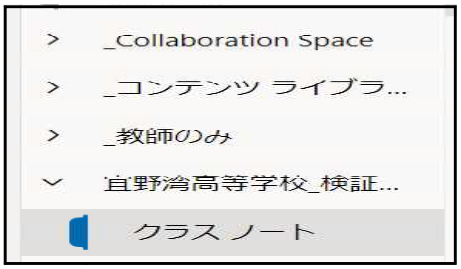


図２ Classnotebook

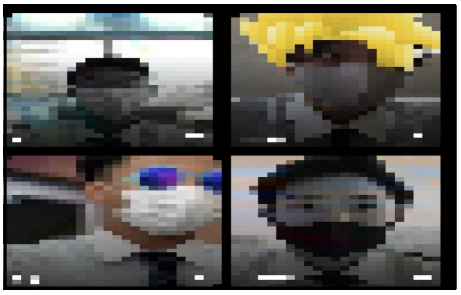

図３　Flipgrid共有画面



図４ 個人へのコメント一覧

表７　検証授業におけるＩＣＴの活用法

活用法	場面説明
Flipgrid 動画撮影・投稿、コメントの共有が簡単。生徒が楽しみながら活用できる。 【活用の流れ】 ◎課題提示 ・課題の原稿作成 ・動画制作、動画投稿 ・評価コメント等共有 ・原稿改稿 ・動画再制作、動画再投稿 ・評価コメント共有	◆自己紹介動画制作 ・友人に対して、自身の良い点などのアピールポイントを、分かりやすく説明するという設定で自己紹介文を書く。 ・各自のタブレット端末で、原稿をもとに自己ＰＲ動画を撮影して投稿する。 ・投稿された動画は、Flipgridの共有画面に一覧表示されるので、全員の動画を視聴し相互評価する。コメントやアドバイス等は、文字や動画で自由に行う。 ・制作者は、クラスメイト全員からの評価コメントやアドバイスなどを見て、必要ならば、原稿の訂正、動画の取り直しを行う。 ◆ニュース動画制作 ・新聞記事を選んで、内容を整理し、ニュース動画用のアナウンス原稿を書く。 ・各自のタブレット端末を使い、アナウンス原稿を読みながらニュース番組の動画を撮影して投稿する。 ・投稿された動画を全員で相互評価（文字テキストや動画でコメント）する。 ・友人からのコメントやアドバイスなどを見て、原稿訂正後に、再度動画を撮り直す。
OneNote Class Notebook WordやExcelで作成した資料、画像だけでなく、Webページ、ファイル、音声、動画など様々な情報を集約できるデジタルノートアプリ。スマートフォンやタブレット、ＰＣからメモ等で情報収集整理が可能。複数任との情報共有や同時編集もできる。	◆小論文「情報・知識を集め、デジタルノートブックに集約する」 【個人学習】・個人のクラスノートセクションに、自分の直接体験だけでなく、新聞や書籍、雑誌、インターネット情報等の間接体験、関連情報を集め、整理する。 【協働学習】・個人で集めた情報をコラボレーションスペースに、語句・用語とその定義や意味、出来事、具体例、出来事や具体例の詳細を調べて、コラボレーションスペースに補足追加、整理する。
Teams インターネットを介して、誰とでも、どこからでも、どのような端末機器からでも活用できるオンラインツール。オンライン授業、同時編集作業、課題の作成提示回収、生徒や教師との文字・動画コミュニケーション、個人データの保存、生徒と教師、教師間の教材やデータの保存等様々な活用が可能。	◆小論文「集めた情報や知識を共有や同時編集し、構成などを話し合う」 【個人学習】・集めた情報について、現状、原因理由、課題問題点、対策解決などの観点で、文章構成を考えExcelシートに整理する。 ・Teamsに保存した個人のExcelシートに、クラス全体で収集整理した情報について、それぞれの生徒が、小論文を書く際に必要だと思う情報を選択し、文章構成を考え、分類と整理をしていく。 【協働学習】・Teamsのファイルに作成したグループのExcelシートに、個人で考えた構成の概要をまとめ、グループ全員の文章構成情報を一覧表として作成共有する。 ・グループ構成表を見ながら、グループとしての文章構成を話し合い、シートに整理していく。 ・グループメンバーで協力しながら各構成段落の用語について、簡潔に説明する。 ・グループでまとめた構成についてメンバーで話し合いながら、課題、結論、各段落の流れの各項目を、短文でまとめて要約する。

３　実態調査

(1) 目的

①　意見文を書くことについて、生徒の実態を把握する。

②　学習の課題や指導方法を考えていく際の基礎資料、検証資料とする。

(2) 対象および実施期日

①実態調査Ａ　対象：沖縄県立宜野湾高等学校３学年（195名）

期日：2021年７月８日

②実態調査Ｂ　対象：沖縄県立宜野湾高等学校３学年「国語表現」選択者（54名）

期日：2021年９月６日

(3) 実態調査Ａの結果と考察

検証授業前の実態調査では生徒の70%～80%近い生徒が小論文を書くことに対して「得意ではない、好きではない、書けない」という意識を持ち、否定的な意見が多い。否定的な答えの理由には「書くこと（文章表現）が苦手」「文章の組み立て方わからない」「書いたあとの評価がわからない」「書きたい内容がない」「時間がかかる」という内容が多かった。

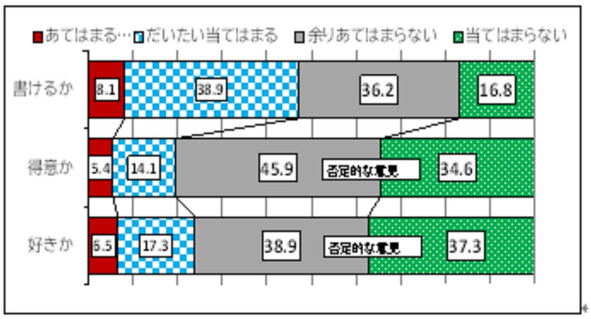


図５　小論文・意見文に関する実態調査Ａ

(4) 実態調査Ｂの結果と考察

実態調査Ｂにおいて、90%近くが「小論文や意見文を学ぶことは将来の役に立つ」と考えていて「学びたい」と回答している。しかし、生徒のほとんどは「小論文を書くことは苦手」と回答している。何が苦手なのかを知る具体的な手がかりとして「どの段階が最も困るか」という質問を行ったところ「書き始める前」が32%(17/54人)で「書き始める時」が40%(22/54人)という回答をしており、多くの生徒が小論文の書き始めで困難な気持ちを抱いていることが分かった。では、小論文が課されてから書き始め段階での気持ちについて質問してみると、「書けないと思うのであきらめる。」「良い内容ではないと思うが書き始める。」といった回答をする生徒が半数以上いて、「どうにか書いてみる。」「それなりの文章を書こうと思う。」という主旨の回答が多かった。調査結果から、生徒は小論文などを書くことの必要性を感じているが、書くことにかなりの苦手意識を持っており、特に文章を書く前の段階である文章の「内容の充実、文章構成」「言語・文章表現方法」などが分からず、困難を感じているという実態が浮かんできた。

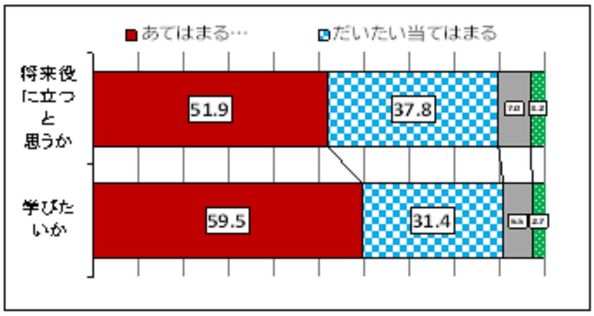


図６　小論文・意見文に関する実態調査Ｂ

従前の小論文指導では、文章構成や記述内容、言語事項について生徒が文章を書いた後の添削指導が多く、生徒の実態に教師の指導が対応していないという点を踏まえると、論理的な文章を書く力の育成には、文章化前の「内容充実と構成・型」の指導、それによる苦手意識を和らげ意欲を少しでも高める指導の必要性を確認できた。そこで本研究では、「書くこと」の学習過程の中でも、文章化する前の活動へ焦点をあて、情報収集や整理の観点を提示することで、文章構成の型を常に意識しながら情報を整理したうえで小論文を書くという授業を行う。そこに、生徒が意欲や関心を示すようにタブレット端末を活用した協働学習を行うこととする。それにより「何を書いて良いかわからない」「文章構成が分からない」ことによる書く事への抵抗感を減らしながら、文章構成の型を身に付け論理的な文章を書く力を育むことができると考える。

Ⅲ　指導の実際

１　単元名　　国語表現「小論文Ⅰ、Ⅱ」（教材名　「小論文Ⅰ、Ⅱ」）

２　単元目標

(1) 文章の種類や特徴、構成や展開の仕方などについて理解を深める。考えを表現するために言葉の特徴や使い方に関して理解できる。　（知識及び技能）

(2) 読み手の同意が得られるよう明確な意見と適切な根拠を示すとともに、論理の展開を考え文章構成や展開を理解して活用できる。　（思考力、判断力、表現力等）

(3) 論理的文章を書くための情報を分析・整理、文章化の過程において、構成や展開の仕方の理解を深めようとしている。読み手の同意が得られるよう構成表や文章を記述しようとしている。　（学びに向かう力、人間性)

３　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現等	主体的に取り組む態度
実用的な文章などの種類や特徴、構成や展開の仕方などについて理解を深めている。言葉の特徴や使い方に関して理解している。	読み手に対し自分の思いや考えが効果的に伝わるように書かれているかなどを吟味し、読み手からの助言などを踏まえ、自分の文章を整えたり、自分の文章の課題を捉え直している。	文章の種類や特徴、構成や転換などについて理解を深めたり、読み手に対して自分の思いや考えが効果的に伝わるように書かれているかなどを吟味して、読み手からの助言などを踏まえて、文章を整え、自分の文章の課題を捉え直したりしようとしている。

４　単元の指導計画と評価計画【活用ツール】・ワークシート・Flipgrid、OneNote、Excel等のアプリ

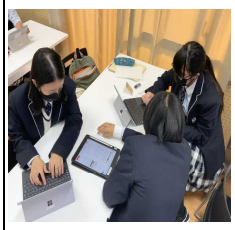
時	ねらい・学習活動	ＩＣＴ活用	評価方法
1 ／ 2	◆報道文の文章構成を考える。 新聞記事の特徴を捉え、そのニュースの持つ社会的意味が分かるように、整理しながら原稿を書き、発表する。 【個人学習】 ①新聞というものの特徴を考える。　②文章構成を考える。 ③記事の社会的意味を考える。　④相手に伝わる動画を作成し発表する 【全体共有】 ①コメント欄を見て相互評価し合い、自己の考えを深める。	◆説明 PowerPoint ◆動画、共有 FlipGrid ・動画作成 ・共有 ・評価	【思・判・表】 適切な題材を決め、情報の組み合わせを工夫し伝えたいことを明確に要旨を書いている。
3 ／ 4	◆相手に伝わる構成を考える。 読み手の共感が得られるよう、適切なテーマと具体例を効果的に使いなど、文章の構成や展開を工夫する。 【個人学習】 ①自己取材する。②自己のアピールポイントや長所を選ぶ。③分かりやすい構成を考え原稿を作成。④相手に伝えることを意識し動画を作成発表。 【全体共有】 ①コメント欄を見て相互評価し合い、自己の考えを深める。	◆説明 PowerPoint ◆動画・共有 FlipGrid ・動画作成 ・共有 ・評価	【思・判・表】 読み手の同意が得られるよう文章の構成や展開を工夫している。
5 ／ 6	◆小論文の学習について学びの見通しを持つ。 どうやって課題に取り組んでいくのか、見通しを立て全体で共有する。 ①個人の取り組み、②全体での取り組み ◆題材設定し、適切な情報の収集、分類、整理を行う。 社会の中から課題を見つけ、必要な材料を集め、自分の考えを持ち、他者との意見交換等から自分の考えを形成し、広げ深める。 【個人学習】 ①題材の選定、②情報収集等、③情報分類・整理 【ペア学習・グループ学習・全体共有】 ①対話学習によって、学びを深める。②情報集約 比較 整理 意見交換、話合いを踏まえて、再度、個人で思考し、まとめる。	◆説明 PowerPoint ◆情報集約 Class Notebook ◆協働作業 Teams	【知・技】 必要な語句を増やし、語感を磨きいている。 【思・判・表】 社会的な課題から問題点を見つけ、情報収集・分類・整理を行い、自分の考えを広げている。
7 ／ 8	◆検討した情報をもとに、論文の型を基本とした内容構成を行う。 テーマに関する意見主張とそれを支える根拠をまとめ、主張が説得力あるものにるように構成を考える。 【個人学習】 ①テーマに関する主張や意見、結論を考える。②主張等を支える根拠を複数集め整理する。③小論文を構成する材料を選ぶ。④項目の順番を考える。 ⑤小論文「型」に沿って、構成を作成する。 【ペア学習・グループ学習・全体共有】 ①情報集約 比較 整理 意見交換　②「定義、現状、原因・理由、課題・問題点、対策・解決策」等の項目で構成するようまとめる。 【個人学習】 話合いを踏まえて、再度、個人で思考し、要約文にまとめる。 ①構成の精査、短文要約	◆説明 PowerPoint ◆情報集約 Class Notebook ◆協働学習 Teams	【思・判・表】 主張や意見を支える根拠、理由付け、具体例等の役割を意識し、構成表を作成している。 
9 ／ 11	◆検討した構成表をもとに、意見と根拠を中心に、自分の考えが伝わるよう適切に文章表現を行う。自分の考えを明確にし、根拠となる情報をもとに的確に説明するよう、表現のしかたを工夫する。多面的・多角的な視点から自分の考えをまとめ、特に主張と根拠を明確にして述べること。小論文の「型」に沿い、段落構造を意識し、自分の主張等が的確に伝わるよう工夫する。 ◆原稿をｸﾞﾙｰﾌﾟや全体で共有、相互評価することで、内容や思考を深める。 小論文をルーブリックに基づき自己評価、グループ内で相互評価を行う。 【個人学習】 ①主張や意見、②理由原因、③課題・問題点、④解決策等を書く。 ⑤構成表等をもとに400字～600字の小論文を書く。 【ペア学習・グループ学習・全体共有】 ①お互いの文章を読み、主張や意見が明確に記述されているかを検討する。 ②ルーブリック表等を使って、お互いの作品を相互評価する。 話合いを踏まえて、再度、個人で思考し、まとめる。	◆説明 PowerPoint ◆情報集約 Class Notebook ◆協働学習 Teams ◆共有 自己評価 相互評価	【思・判・表】 自分の意見や主張が伝わかるように、段落構成や段落のつなげ方を意識して記述している。 
12 ／ 13	◆個人の評価や相互を振り返り、自己の考えを整理し次の学習へつなげる。 単元のまとめ。自身の評価やクラスメイトの評価を共有し学びを深める。 ①できた事は何か　②分かったことは何か　③どうやったらできたか ④クラスメイトの良さに見つける 自分の学習が、今後のどういう場面で活用できるかを意識付けるため、自分の考えを再整理して今後につなげる。	◆共有 自己評価 	【思・判・表】 主張根拠などを的確にまとめている 【態】 他者の意見を意識し自分の考えを深めようとしている

５　本時の指導

(1) 本時のねらい

収集した情報を小論文の「型」を活用することで、意見と解決策などを的確に示し、自己の考えをまとめて明確な話の流れを作ることができる。

(2) 本時の展開

	学習活動・	指導の留意点	評価規準
5分	①前時までの学習を振り返る。 ②収集した情報内容を再確認する。	・収集した情報をみながら語句の意味、特にキーワードの定義・内容を確認する。	【知・理】 語句の意味、文章構成を理解している。
35分	③収集した情報について全体で共有しながら内容を確認する。 ④文章構成の項目を再確認する ⑤論理の筋道、文の組み立て、内容のつながりを確認しながらワークシートに整理する。 【個人学習】 ・テーマに関する主張や意見を考える。 ・主張や意見を支える根拠を集め整理する ・小論文を構成する材料(情報)を選ぶ。 ・小論文「型」に沿った構成を作成する。 【グループ学習・全体共有】 ・「現状・理由・問題点・解決策」の項目で構成かを検討する。 ・情報集約 比較 整理 意見交換 ⑥個人で考えた構成をグループ表の各人の欄にも整理する。 ⑦グループで各人の構成について構成内容を説明する。 ⑧論理の流れや内容のつながり、解決策や結論を考えながら、グループでひとつの構成にまとめていく。 	③現状、問題点、原因・理由・背景、具体例、解決策の項目に、適切に分類整理されているかを共有しながら確認する ④文章構成の視点を基に分類していくことを確認する。 ⑤他人の意見を共有することで自分の意見と根拠などを明確にし、自分の考えの形成に役立てる。個人シートに、収集した情報を整理をしながら構成を考える。	【思・判・表】 主張や意見を支える根拠、理由付け、具体例等の役割を意識し、構成表を作成している。 他人の意見を聞きながら、自己の考えや思いを捉え直している。 
10分	⑨グループでの話合いを踏まえて、再思考し、構成表の各項目について、短い文で要約する。	⑨グループ内の意見を参考に自分の言葉で要約する。	【思・判・表】 自分の考えを明確にして、的確に説明する。

(3) 評価方法：情報分類整理に関するルーブリック【定義、現状、原因・理由、問題点、解決策】

	観点	A	B	C
収集整理	構成要素	全観点の情報について５つ以上適切な情報を集めている。	４つ以上の観点のうち３つ以上の適切な情報を集めている。	観点毎に情報量のばらつきがある、集めていない。
構成	情報分類整理	必要とする情報を整理して、適切な情報をほぼ選び出し、情報のつながりがある。	必要とする情報の整理ができていないため選び出した情報のつながりがない。	必要とする情報が未整理で情報を適切に集めていない。
	主張・理由等が明確か内容の一貫性はあるか。	主張・理由等の根拠がすべて書かれていて、それぞれがつながっている。	問い主張理由等の根拠がすべて書かれているが、つながりが分かりにくい。	主張・理由の一方がない。またはつながりが非常に分かりづらい。

Ⅳ　仮説検証

本研究は、小論文などの論理的文章を書く学習において、ＩＣＴ活用による情報収集と文章構成などの協働学習を通して論理的な文章を書く力の育成ができるだろうという仮説に基づいて行った。社会的課題について情報収集・分類整理した学習活動、構成の検討や文章のつながりを意識した学習活動、自己の主張や意見と根拠を適切に文章に表現する学習活動がどの程度達成できたかを検証する。具体的な検証の手立てとしては、動画や作品の自己評価や相互評価、事前事後のアンケート、収集した情報の質や量、整理、ワークシート、小論文作品を分析・考察し、生徒の変容を見取る。

１　書くことへの意識が変容したか

(1) 検証前と検証後のアンケート結果の検証

検証前後の意識面の変化をアンケートから考察する。意見文や小論文を書くことに対する感情的な「好きか・得意か」の質問には検証前後とも否定的意見が多い。しかし、検証授業後に「あてはまらない」と回答した生徒が12.7%も減少しており、検証授業により苦手意識の変容があったと考えられる（図７）。

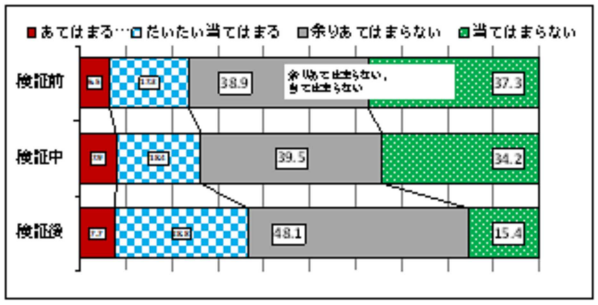


図７　小論文・意見文を書くことは好きか

「小論文意見文の書き方を学ぶことは将来に役に立つと思うか」「小論文意見文の書き方を学びたいと思うか」という質問に対しては、もともと肯定的な回答が多かったが、検証授業後は、ほぼ 100%の生徒が肯定的な回答をしていて「あてはまらない」と回答した生徒はいなかった（図８）。また「小論文意見文を書くことはできるか」における回答の比較では「あてはまる」 8.1%から21.2%、「だいたいあてはまる」が38.9%から53.8%へと肯定的な答えをする生徒が増える結果となった（図９）。

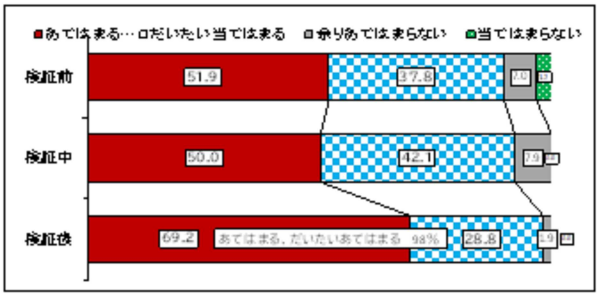


図８　小論文等を書くのは、将来役に立つと思うか

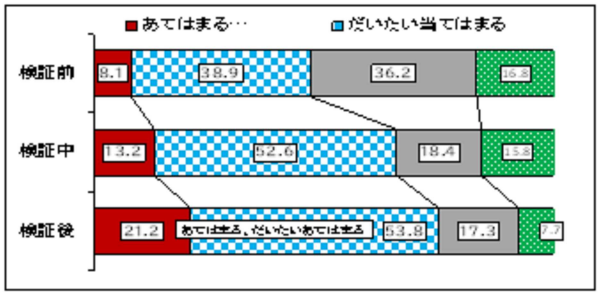


図９　小論文・意見文を書くことはできるか

今回の検証授業へ生徒が意欲的に取り組んだ結果として、「小論文や意見文を書くことができるか」という問いの肯定的な回答が46%から75%に増えたという数字に表れていると推察する。その点は、生徒自身が書いた検証授業後感想からも読み取れる（表７）。

表７　検証授業後の感想

・書き方が分かり少し苦手意識がなくなった。
・めんどくさいとか難しいという思ったけれど、手順やポイントを押さえられることができたから、書けると思えるようになった。
・まだまだ自分の言葉で書くのは苦手だけれど、前より楽に書けるようになった。
・まだ少し不安はあるが、構成や内容をしっかりと書く自信がついた。

以上の考察から、検証授業で行った文章化前の内容の充実と構成の手法を学び身に付けることが、苦手意識を減らしながら、小論文を書く力を高める有効な手立ての一つになり得ると考える。

(2)　Flipgridの活用による意欲などの検証

授業前に記述した自己アピール文と動画作成を目的とした自己アピール文の内容や文字数の比較、動画作成の授業観察において考察する。文章を書くことに対する苦手意識を減らす手立てとして生徒の身近にある動画アプリの活用する。文章を書くことを目的とせず、自己アピール動画作成するために文章を書くという授業を設定し、生徒の苦手意識の変容が見られるかを試みた。まず始めに自己アピール文を自由形式で書いてもらった。その後、Flipgridというアプリで自己アピール動画を作成しクラス全員での共有とコメントを行う課題を設定した（図10・11）。自己アピール動画制作の授業では、ほとんどの生徒が、すぐに自己アピールのための原稿作成に取りかかり、生徒同士で原稿を添削し合い何度も書き直し、楽しみながら動画を作成していた。動画を何度も撮り直す生徒もおり、特に原稿を書くことに負担感を感じている様子は見られなかった。最初の自己アピール文と動画原稿の自己アピール文を比較すると、文字数では、最初の自己アピール文が平均 60字程度だったのに対し,動画用の原稿の文字数の平均 は 200字 以 上と増加している。内容も学校生活や普段の自分の様子、特技長所、クラスメイトへの呼びかけなど内容の深まりが感じられ、やユーモアに富んだ文面となった。授業後アンケートでも「友達と協力できて楽しい」「動画にすることで言葉のニュアンスや意味を考えられた」「原稿を書き動画に撮ることで、直した方がいい点を見直せた」という回答から、動画そのものを楽しみ書くことに対する苦手意識を感じていない様子が見て取れた。このことからＩＣＴを活用し生徒自身が楽しみながら主体的に協働し思考する授業は、書くことへの抵抗感を和らげ、主体的な書き方の学びにつながるきっかけとして有効だと考える。


図10 Flipgrid撮影の様子


図11 動画へのコメント

２　書く内容について変容はあったか

(1) OneNote Class Notebookを活用した協働学習の検証

授業観察より書く内容に変容があったかを考察する。まず「書けない」理由の一つに、書くための知識がないという点がある。それに対する手立てとして、Class Notebookというノートアプリをデジタルポートフォリオとして活用し、小論文についてグループで話し合いながら協働しての情報収集することを試みた（図12）。これまでの授業では、情報収集の方法として、まず新聞切り抜きや雑誌のコピー、書籍の内容要約、その他の実物資料を収集し，ノートやクリアファイルに整理するという作業を行ってきた。この作業は時間と根気を要する作業であり、ある程度の資料を揃えて整理するまでの最低でも４～５時間、長ければ10時間程度かかっていた。しかし今回の検証授業では、まず３人から４人のグループで情報を集め、その後クラス全体の資料をClass Notebookというアプリに集約して保存したため２時間程度で多くの情報を集めることができた。この作業では、生徒同士がどの情報が良いのか類似の具体例を検討したり、一つの情報の内容や専門用語の意味や定義が分からない場合に、互いに教え合うなど自主的な学びの様子も観察でき情報内容の理解にもなっていた。検証授業前後アンケートにおいても、「集めた情報を必要に応じて整理することができるか」という質問に対する回答は「あてはまる」が15.7%から32.7%となり、全体的な数字の変化で見ると「できる」という肯定的な回答が増加していた。この点からも今回のＩＣＴを活用した情報収集をグループの協働作業で行うということは、文章化をする前の「書く内容の充実」の面から有効な手立てだてと考える。

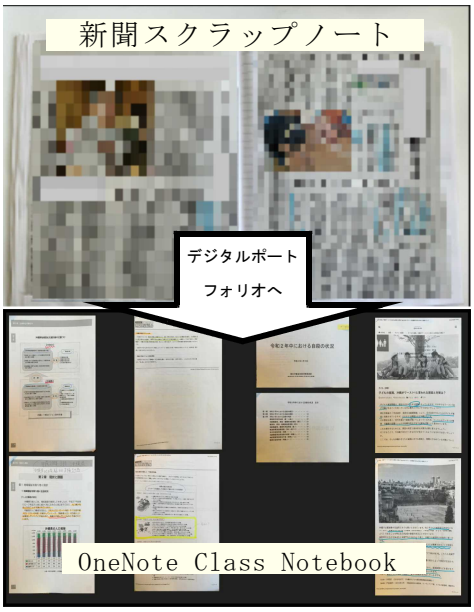


図12 スクラップノートから
デジタルポートフォリオへ

(2) 小論文原稿の字数や内容による検証

検証授業の前後に課した500字程度の小論文における内容の深まりなどから､文章内容に違いがあったかを考察する。検証授業前の文章は、課題の解決策や結論が具体的でなかったり、生徒自身の経験が一般的な解決策となっていたり、出来事の問題点がはっきりしないという小論文があった。検証授業後の文章は、課題に対する適切な具体例が選択され、その問題点と解決方法もしっかりと説明されていて小論文としての内容に足るものが多かった。

３　文章構成における変容はあったか

(1) 構成表を協働学習で作成・活用することへの検証

Teamsのフォルダ内に、Excelで作成した構成表を共有し、同時編集しながら整理するという文章構成を学ぶ授業方法について考察する。書くことが苦手な理由のもうひとつには、書く方法、構成が分からないという点がある。特に文章構成を考えることは、論理的思考を育成することにもつながる重要な点であり、過去の研究者も多くの授業実践を行ってきた経緯がある。文章構成が分からないという点に対する手立てとして、本研究においては、構成を学ぶというよりも文章化以前の段階から構成を意識した情報収集を行うという方法を採った。これまでのように情報を手当たり次第で無秩序に集めることをせず「現状、具体例・経験、原因理由、問題点・課題、解決策・対応策」という観点による構成を意識しながら収集と整理をグループで行うこととした。Teamsのフォルダ内に置いたExcelで作成した構成表を共有し、協働で同時編集しながら入力整理することにより自然に構成を考えていく形とした。この方法を採ることにより、生徒は課題と解決策、具体例の問題点、問題が起こる原因や背景などを常に考えながら情報を整理することや、一つの出来事や具体例についてグループメンバーと話し合いをしながら内容を深め、事柄と事柄のつながりを何度も思考を重ねてまとめていく様子が観察でき、論

理的思考の育成には有効な手立てとなることが確認できた。

授業後アンケートにおいても、「論文の内容を分かりやすく伝えるために、どのような構成にすべきか理解できましたか」という質問に対して「よく分かった、だいたいよく分かった」という肯定的意見がほとんどであった。また「小論文を書く時に重視すること」を検証授業の前後で質問したところ授業前は誤字脱字、字数や締め切りという表現に関する項目を挙げた生徒が多かったが、授業後は文章構成、段落分け、構成メモを作るなど、文章の書き方を挙げる生徒も多かった。さらに、文章構成を行ってから文章化するという流れでの授業方法に関しては「書き方、構成を知ることができたので、これから活用したいと思った」「文章構成を自分で考えながら書くことができるようになった」「文の構成が分かり、小論文を書くことへの不安が減った」「段落構成が分かったから、段々書けるようになった」「苦手だった書き始めがスムーズに書けるようになった」ということであった。こういった点から、ＩＣＴを活用して個人とグループの学習を繰り返しながら書く方法と構成を学び整理するという本研究の手立ては、構成を学び活用することによる論理的思考力を育む基礎となることが確認できた。

(2) 検証授業前後の構成内容などの検証

検証授業で53名の生徒が書いた小論文を考察する。本研究では表現技法の点ではなく、論理的に段落構成ができているかという点と、意見や主張の明確さと内容的なつながりの点を評価した。つまり、出来事の現状状況と、その状況が起こる原因や背景、出来事の問題点、問題の解決策が矛盾なく文章化されているかを判断する。主観的判断にならないようルーブリック表で、構成（問いへの答えが明確）、一貫性（序論から結論への流れが一環している）、段落（段落分け数や分量が適切）、論理性（現状の原因や理由、問題点が書かれている）、内容（事実と意見、具体例や事実を挙げている）という観点を基に小論文を評価していった。

記述量（文字数）は、40分で400字から500字（実字数。段落間の空白部分を含まず）の範囲で書けるかどうかを目安として判断した。 検証授業前の53名の小論文では, 平均 373字39名（74%）の生徒が目標を達成した。目標の400字を超えなかったのは14名、うち、5名は 100字以下であった。検証授業後の小論文では全体平均文字数が416字、48名(90%)が400字以上で、300字台の５名も段落間の空白部分を含めると400字を超えていて目標を達成した。検証授業前の小論文で300字以下の文章を書いた者はすべて400字以上記述していた（図13）。

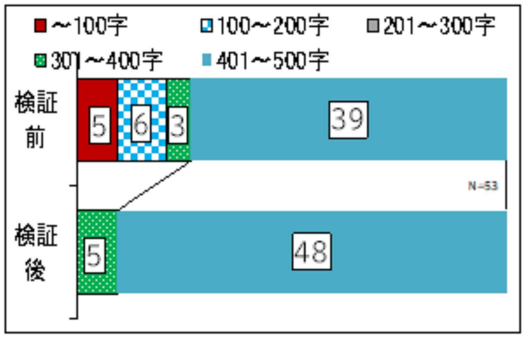


図13　小論文の記述文字数の変化

段落構成は、400字～500字の文章で一般的である３段落から４段落を目安に判断した。検証授業前の小論文では、２段落以下で書いたのが24名、３段落が17名、４段落が６名、５段落が６名であった。２段落のうち10名は 300字に足りず内容が途切れ、論理的文章としての構成が成り立っているものはなかった。検証授業後の小論文では、２段落以下で書いたものが５名、３段落が８名、４段落が18名、５段落が22名であった（図14）。

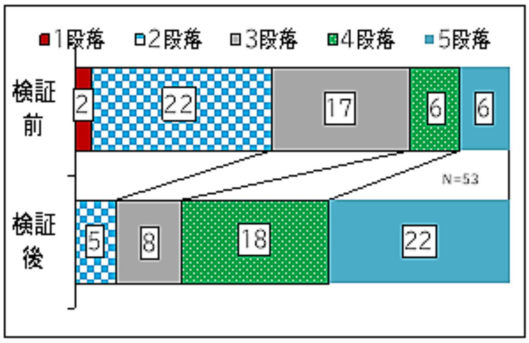


図14　小論文の段落構成数の変化

内容面では、論理的な思考の流れが見える記述がなされているかを判断した。具体的には、問いへの答え（解決策）が明確であり、文章の始めから終わりまでの内容の一貫性やつながりが明確であること、事実と意見、その根拠が書かれているかの項目を評価した。検証授業前に書いた文は、ただ現状を述べていたり、自分の経験の範囲で解決策を述べていて一般化できていなかったり、解決策や対応策を明確に表現してい

なかったりするものがあり、53作品のうち22作品は、論理的な思考流れが内容として表現されていなかった。検証後は53作品のすべてが論理的な思考の流れが読み取れる内容となっていた。段落構成が２段落以下という文章や、検証前に文字数が200 字以下であった11人の文章も検証授業後は意見や主張と根拠を対応させ、原因・問題点・解決策という構成面でも向上し、思考形成や深まりがあり、論理的な思考の流れで書かれた文章と判断できる。

４　ＩＣＴ活用による情報収集と文章構成の協働学習を通した、論理的に書く力を育む指導

本研究は、これまで小論文や意見文といった論理的文章の指導として行われることが多かった記述後の文章添削指導ではなく、文章を書く前段階である情報収集や構成の指導を行うことで、論理的文章を書く力を育むことができるだろうという仮説の下に実践してきた。苦手意識を意欲の面と内容と技術の面に分け、その検証授業を行って上記のような結果となった。一つ目に、書くことへの意欲の面においては「書くこと」という文章表現そのものを目的とするだけでなく、ＩＣＴ活用で生徒の苦手意識を減らすことが可能であることが分かった。あらかじめ準備した内容を教え込むという教師主導ではなく、生徒の生活に根ざしたＩＣＴツール活用が興味や関心を高め、生徒主体・相互学習の授業となり考えの形成や内容の深まりを図ることにつながったと推測できる。二つ目は、書くことの内容充実や書く方法の面においては、社会における生活体験が少なく、社会課題に直面する場面も少ない生徒に対して、しっかりと情報を集めることで間接体験による意見や主張の形成を図ることができた。情報収集と同時に、情報や自身の考えの整理、文章構成、要約、相互評価が行えるよう授業を組み立てた。授業を個人学習で自問自答しながら考えを形成し、その後グループ学習で他者に自分の考えを伝え理解を得られるよう話し合いながら、テーマ内容を広げ思考を深めることができる学習形態をとった。同時に協働作業を可能にするＩＣＴを活用し、自分とグループメンバーの情報や意見を比較し合いながら、論理的な考えの流れを検討して、適切な解決策や対応策を導くような学習となった（図15）。協働学習で学習活動を興味深く活発なものにすることで、検証授業前に見られた「書けない」ということの改善が図られるだけでなく、文章内容の深まりと構成力が身に付き、論理的な文章を書くことへつなげることが可能であると考える。



図15　作文評価の様子

Ⅴ　成果と課題

１　成果

(1)　ＩＣＴを活用して、動画作成を通した文章化を行うという授業では、生徒が主体的に積極的にアナウンス原稿などを書く様子あり、文章を書くことへ意欲的に取り組む姿が見られた。

(2)　個人学習において自己の考えの形成を行うと同時に、ＩＣＴを活用した協働学習で他者の意見に触れ相互交流と振り返りとを繰り返すことにより、思考が深まり考えの再構築がなされ、論理的思考力を身に付け、書く力を育成できた。

(3)　論理的文章構成を意識した情報収集と整理、内容の分析にＩＣＴを活用したことで、思考が視覚化され内容把握が容易になり、明確で論理的な文章記述を行うことができた。

２　課題

(1)　学習評価については、授業後だけでなく情報収集後や構成表作成後もＩＣＴを活用し効率的な自己評価と全体評価を共有するができれば、学習過程全体で生徒の課題テーマに関する理解が深まり、より論理的な文章を書くことが期待できる。

(2)　表現学習では、思考力の基礎となる用字用語や言語的表現指導も必要であるが、ＩＣＴを活用して効率的な取組が行うことができれば、より的確な文章表現等が期待できる。

(3)　協働学習の内容が深まるように、Teams のホワイトボード機能を活用する指導の工夫が必要である。

〈参考文献〉

野中潤著　2021　『ＩＣＴで変える国語授業』　明治図書
金子泰子著　2020　『大学生の長作文練習』　溪水社
金子泰子著　2018　『二百字作文練習』　溪水社
難波博孝著　2018　『ナンバ先生のやさしくわかる論理の授業』　明治図書
文部科学省　2018　『高等学校学習指導要領（平成30年告示）』
大杉昭英解説　2017　『平成28年版中央教育審議会答申　全文と読み解き解説』　明治図書
田中宏幸編　2016　『「書くこと」の学習指導』　溪水社
野中太一著　2016　『活きてはたらく論理的思考力』　東洋館出版
清道亜都子著　2013　『書くことの教育における理論値と実践値の統合』　溪水社
井上尚美編　2012　『論理的思考を鍛える国語科授業方略 中学校編』　溪水社
吉田茂樹著　2012　『対話による文章表現指導の研究』　溪水社
日本言語技術教育学会編　2011　『この言語技術で思考力・表現力が高まる』　明治図書
市毛勝雄著　2010　『小論文の書き方指導』　明治図書
木村正幹著　2008　『作文カンファレンスによる表現指導』　溪水社
松下佳代著　2007　『パフォーマンス評価』　日本標準
野口芳宏著　2005　『作文力を伸ばす、鍛える』　明治図書
長谷川祥子著　2003　『論理的思考力を育てる授業の開発　中学校編』　明治図書
松浜市立広沢小学校著　2003　『論理的思考力を育てる授業』　明治図書
小田勝巳著　1999　『ポートフォリオ学習と評価』　学事出版
日本言語技術教育学会編　1997　『倫理的思考力を鍛える作文技術』　明治図書
桜沢修司著　1996　『論理的な作文の指導技術』　明治図書
中西一弘編　1996　『基礎文章表現法』　朝倉書店
石田恒好　市原菊雄編　1994　『観点別評価の手順』　図書文化社
北尾倫彦　金子守編　1994　『観点別学習状況の評価規準法』
国語教育研究所著　1992　『国語教育研究紀要３』　明治図書
森岡健二著　1988　『文章構成法　文章の診断と治療』　至文堂

〈注釈〉

注ｉ　沖縄県教育情報ネットワーク（Okinawa Prefectural Edcation Network）で使用するアカウントの略称。沖縄県立総合教育センターが県立学校教職員・生徒、公立小中学校教職員に配付している。このアカウントでMicrosoft 365・Google Workspaceやその他Webサービスを利用できる。